

歴史よもやま話 その 23

茶道と禅

侘び茶を完成させたとと言われる千宗易（利休）、彼の高弟が著わした「山上宗二記」に、「茶道は禅宗より出でたるによりて、僧の行ないを専らにす。珠光、紹鷗、悉く禅宗なり」と書かれている。左記はまた「茶禅一味」と言われる。

鎌倉時代 京都・建仁寺の僧栄西が中国から茶の種を持ち帰り、禅僧・明恵に托し、栴尾高山寺に植えた。

また、栄西は「喫茶養生記」を著わし、薬として茶を紹介した。鎌倉幕府三代将軍・実朝が二日酔いの薬に茶を服用したことが「吾妻鏡」に記録されている。

その後、書院造りの床の間に飾り棚を設け、唐渡りの御物（書画・茶道具（*））などを愛でながら抹茶を楽しむ風が流行した。茶の産地を当てる「闘茶」なども行われた。

（*）室町幕府八代将軍・足利義政の山荘・東山に集められた足利幕府の財物、「東山御物」といわれ、同朋衆・能阿弥によって編集された「君台観左右帳記」に記録分類されている。

そして、村田珠光（禅僧・一休宗純に参禅したといわれる）が派手で賑やかな書院茶を整理し、簡素で禅の精神を具現した茶の湯を始めた。その後、武野紹鷗に引継がれ、千宗易によって完成されたという。

禅宗僧侶の多くも茶道を嗜んだが、臨済宗大徳寺の古溪宗陳和尚が有名で、千宗易を得度し居士号「利休」を与えたという。

豊臣秀吉が禁中で茶会を開く際に、千宗易を茶堂として起用したいが、昇殿するには三位以上の位階が必要、僧侶はその埒外であり、利休は古溪和尚によって得度されたとの説がある。

また、茶会記「宗湛日記」の著者・神屋宗湛も、秀吉から大坂城茶会に招待される前に古溪和尚によって得度されており、秀吉が並み居る武将たちの前で「筑紫の坊主」と呼んで宗湛を歓待する様子が記録されている。

茶道では「茶掛け」（掛け軸）が重要な位置を占め、このなかでも禅語の墨跡が大切であり、禅宗の問答集・「碧巖録」に書かれている「日々是好日」、「喫茶去」、「麻三斤」などが多く使われている。

「麻三斤」：僧問洞山 如何是佛 山云 麻三斤とは、僧衣一着分の麻糸のこと
いつでもどこにでも佛がいる

「喫茶去」：趙州 茶を飲んで去れ 誰にも分け隔てなく接する

「日々是好日」：雲門文偃 いつでも良い日